

La MAISON 3



La fin



31

FAMULUS

la fin

3

おとうさん、おかあさん
響子は裕作さんの元へと嫁ぎます。

千草から音無、そして今日から五代へと

苗字が変わりました。

これまで色々御心配を御掛けしたが、

これからは裕作さんと共に歩み

幸せな家庭を築いてまいります。

裕作さんとの結婚を認めてくださったお義父さま。

音無の姓を抜けることをお許しく下さい。

わたし惣一郎さんの分まで幸せになります。

あの人の為にも精一杯生きて行こうと思います。

わたしの行く末見守っていてください。

今までありがとうございます。



「うううっ……ぐすぐす……」
「ちよつとアナタ、いい加減にしなさい、みつともない！」

「だってせつかく音無を抜けたと思つたら、
今度は五代に……わしの響子が……うううっ」

「自分で認めたんでしょ、結婚！」

あの娘の将来を考えたら、家で出戻り生活なんかさせるより
よっぽど幸せですお？」

「わかつている……わかつているが……嫁にやるのはいい、嫌だ〜！」
「……」

「……」

「響子おばさま、結婚おめでとう！」

「響子さん、裕作くん、いい式だったよ、こんなめでたい日が早く来る様に思っておったが今日がその日なんだね。いや改めて結婚おめでとうと言わせてもらおうよ。」



「あ、ありがとうございます。お義父さまにそう言って貰えるとわたしも気が軽くなります。音無の家を出ると言っただけなのにアパートの管理人はまだわたしに任せて頂けるなんて感謝致します。」

「いや、あのアパートは響子さん以外には任せられないからね、ほらあの個性的な住人たちの相手になれるのは君」だけだよ。」

「ねえ響子おばさん、あかちゃんは何時ごろ産まれるの？」
「コラコラ、郁子気が早いぞ。まだ結婚したばかりじゃないか。」
「でも私早く見たいんだもん、響子おばさんのあかちゃん。」

「ははは…郁子ちゃんたら…響子さ…いや響子はどっなのかな？」

「あ、あかちゃん早く欲しいのかな？」

「そ、そうね郁子ちゃんがおばあちゃんになる前には見せてあげられるかもね。」

「やだ、響子おばさんったら！」



「ああっ……これで本当に僕達夫婦になったんだね。夢の様だよ響子。」

「そう、今日から私達は夫婦になったのよもうわたしを一人にしないで、もう寂しい思いはしたくないの。」

「もちろんだよ、響子。寂しい思いはさせない、もう一生離さないよ。」

「裕作さん……」





「ぎ、響子！」
「このまま中で射精って！」

「ああつ裕作……」
「ぎ、響子 ずっとだずっと君とこうしていたい！」
「わたしも裕作にずっと抱かれていたい……このまま……」



「はし、はし。。。」

「響子、出る、また出るよ！」

「来て！思い切り膣内に射精して！」

「おおおっ（ビュク！ビュル。。ビュッ。。）」

何度目かの中出しに裕作のヘニスかわたしの
膣内で暴れ熱い精液を吐き出す。
その体力任せの性交はこれまで経験してきたものとは違い
それなりの新鮮味をもって感じられた。
わたしは今後この雄と性行為をしていくのだ。
そう頭に言い聞かせながら彼の動きに体を併せ腰を振った。



「ケッ！」
き、きついでよ、響子そんなに締め付けたら・・・！」

若い雄の精液が膣内に溢れ、
幾億と言う若く元気な精子が
わたしの卵子と結合し受精しようと
子宮に向かって殺到する。

わたしこの男の子を孕むのか・・・
頭では受け入れようとしているのに
体が拒み中に出された精液を排出しようと
膣壁が押し出す様にざわめく。
もう決めたはずだったのに如何して？



今日は亡き前、夫惣一郎さんの命日。
結婚の報告をかねて音無家の墓参りに来ました。

「惣一郎さんわたしこの人を選びました。
これからは裕作と共に歩いてゆきます
どうか見守っててくださいね。」



「裕作は優柔不断でどこか頼りなく

ちよつと惣一郎さんに似ている処があるの。」

「でもわたしのことを愛してくれている。」

「一生傍に居てくれるって言うのよ。」

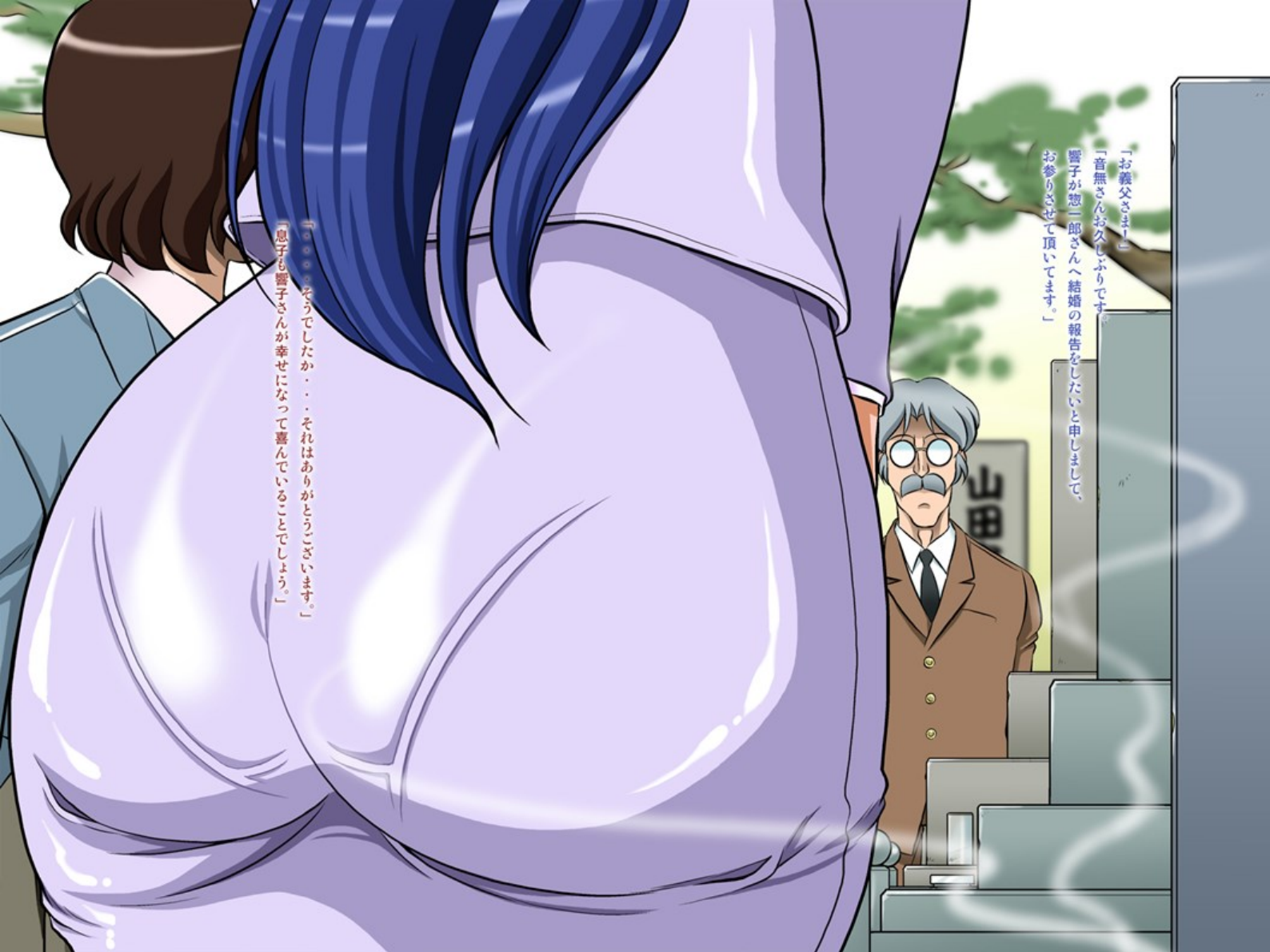
「いいよね？わたしこの人という、

二人で生きて行きたいの。」

ジャリ・・・ジャリ・・・

「おおっ！どちら様かと

思ったら君達だったか。」



「お義父さま！」
「音無さんお久しぶりです
響子が惣一郎さんへ結婚の報告をしたいと申しまして、
お参りさせて頂いています。」

「……さうでしたか……それはありがたう思います。
「息子も響子さんが幸せになって喜んでいることでしょう。」



「もうすっかりお似合い夫婦と言う感じだね
遠目から見ても仲が良いのが判るよ」
「まったくうらやましいね五代君」

「え？そうですかまいったな、ハハハ・・・」
「そんな恥ずかしいですわお義父さま」

「いやいや、二人には惣一郎の分まで
幸せになって欲しいからな」
「息子とそれを望んでおるじやないで」

「ところで夫婦生活の方は順調かな？」

「まあ、それなりに楽しんでます」

「只、最近介護の資格を取ろうと思ってるので夜学に通いだしたので」

「二人の時間が余り取れないのがちよつと……」

「そうか、資格を……」

「いや若い内は学ぶのも大切じゃろう、二人の時間は」

「まだまだこれから幾らでもあるのだからな。」

「では当分あちやんの顔を見ることは叶わんかな？」

「いやだ、お義父さままで。」

「まあ、ワシが生きているうち拝ませて貰えば良いで、ハハハ……」

「ははは……がんばります。」

「あつ……」





「じゃ行つて来るよ響子！」
「ハイ、行つてらっしゃい！」

いつもの朝の日課。
出勤する夫を見送り
気持ちの良い朝の日差しを浴びながら
庭先の掃除をする。

そうして、
今日は切れた二階のトイレの電球を
変えたくらい
そんなことを考えていると...

「やあ、おはよう響子さん。」
「良い天気だね、近くまで来たので
ちよつと寄らせて貰ったよ。」

「お義父さま！」

お墓参りから一週間、
突然前振りも無く現れた。

「庭先ではなんだから上がらせて貰って良いかな？」

何時に無くにこやかな義父が
一抹の不安を感じつつも部屋に招き入れた。



「そろそろ座って下さるね、会茶を炒れますから。」
でも今日は如何したんですか、急にいらっしやるなんて？」

台所に向かうわたしの背後から義父の視線を
感じ背筋に電気が走る。
あの眼だ！
獲物に狙いを付けた肉食獣の鋭い視線に思わず身を固くする

「なに、ちよっと気になる事があったのでな」

「それは「体……」

「響子達の夜の生活のことじゃよ！」

「な、何を言ってるんですか……」

「これじゃ、この尻！」

「なにをなさるんですか？」

「やめて下さい、お義父さまっ！」

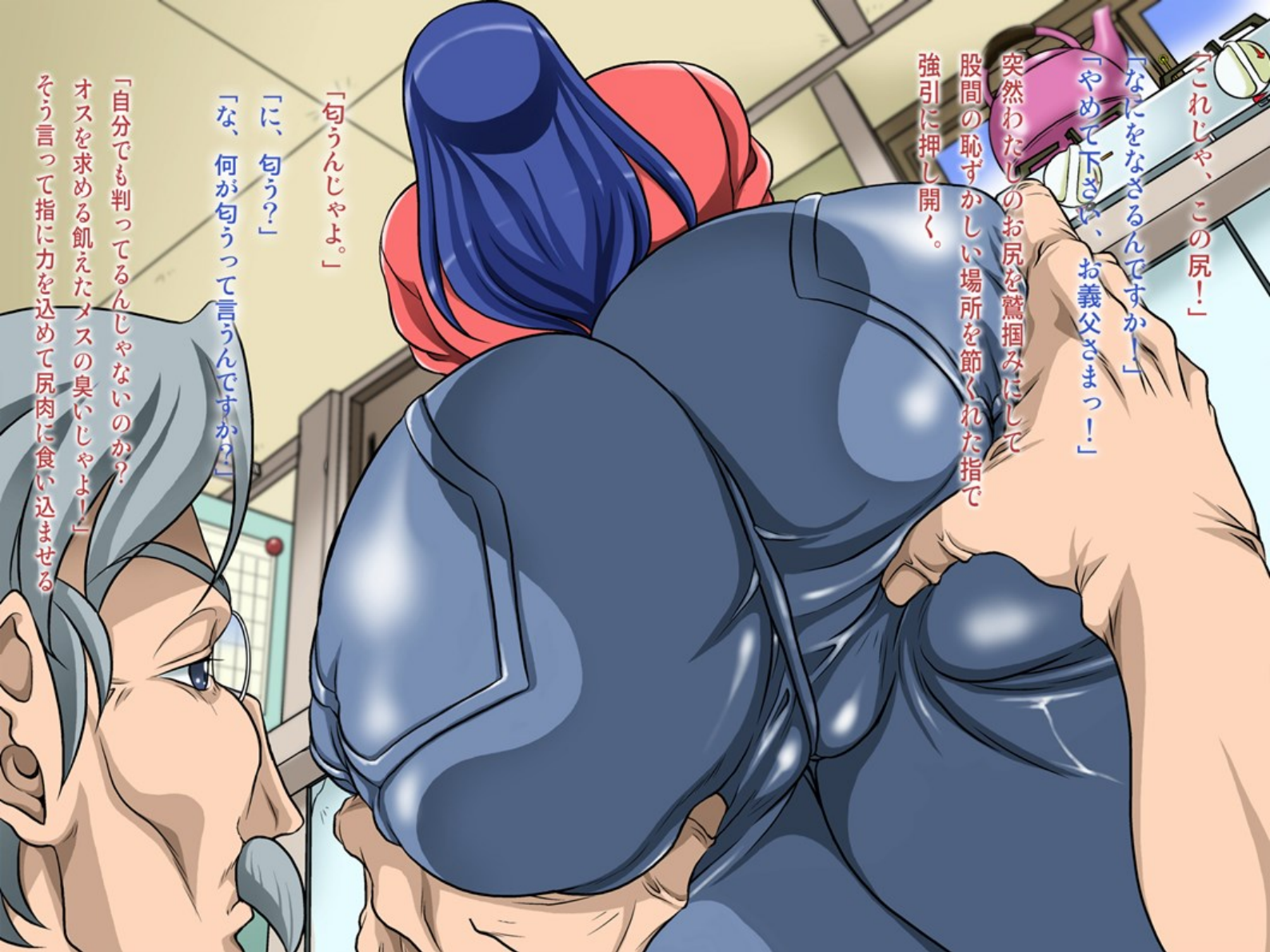
突然わたしのお尻を鷲掴みにして
股間の恥ずかしい場所を節くれた指で
強引に押し開く。

「匂うんじゃないよ。」

「に、匂う？」

「な、何が匂うって言うんですか？」

「自分でも判ってるんじゃないのか？
オスを求める飢えたメスの臭いじゃよ！」
そう言って指に力を込めて尻肉に食い込ませる





う、飢えた雌だなんて
。そんな！

ワシには判るぞ、先週お前の腰を触った時にな。
夜の性活に満足しておらんしやろやろ？

「ぞ、そんなこと。わたしは十分。裕作さんで。」
「おまえを女にしたのは誰だったのかお忘れなのか？」
「この体のおまえ以上に熟知しておるわ」

自分の本心が見抜かれている。
この男には隠し事は出来ない、
彼に馴らされた体が
疼き熱を持って来るのを感じた。

「どれ、ワシがはやくしてやろう、
こんな体にしたワシにも責任があるからな！」

「これじゃ、この臭い！」

「体の奥から溢れ出る膣えたメスの発情臭」

義父はお尻の谷間に深く顔を埋めて
わたしの恥臭を嗅ぎ撫で回す。

「お義父さま、それぐらいで

もうお止めになって下さい。」

「わたしはもう裕作さんの妻に
彼のモノになったのですよ。」

「まだ判っておらん様じゃな、響子！」

「おまえは今もワシのモノじゃ、

この体あんな若造には勿体無いわ！」





ニユルツクチユルル。

長い舌が秘肉を掻き分け膣内を

舐め上げ、舌先で裳を捲り丹念に愛撫する。

「。ああっ」

堪えがたい甘美な痺れに自然と吐息が漏れる。

「如何じや響子、ココを愛撫されると気持ち良からう？」

「おまえの性感帯は隅々まで知り尽くしておるわい、

なんせ開発したのはワシじゃからな」

「あ、。こんな、酷いです。」

「ずっと幸せな生活を、掴めたと、

思ったのに、。」

「ファン！何が幸せな生活じゃ。
あんな風采の上がりぬ平凡な男に
おまえを満足させられるか！」

「何でそんな酷い事を・・・
お義父さまも結婚に賛成なさったじゃありませんか？」

「考えが変わったのじゃよ。」
「惣一郎の墓の前でおまえら二人を見たときにな！」





「息子の前で自分だけ幸せになろうなどとぬかしおって、我が音無家の血脈が絶えるのがそんなに嬉しいか？」

「いいえ、けしてそのような事は・・・」

「では産むのだな？」

「え？」

「惚けるでない！」

「私との子を、音無の血を継ぐ子供を儲けると約束したはずだ。」

「忘れたとは言わさんぞ！」

「・・・そんな・・・そんな事無理です。」

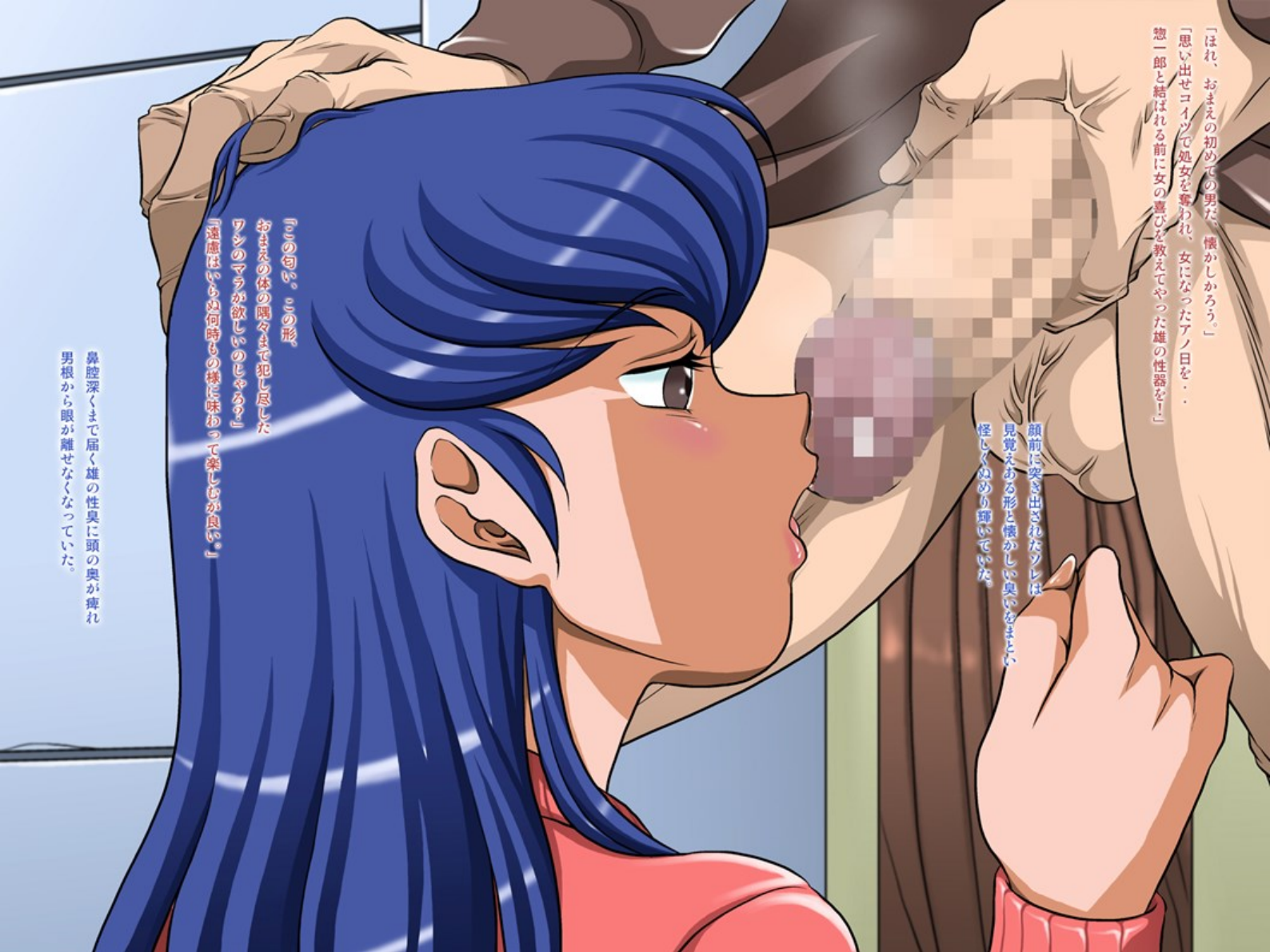
「無理か如何かは体に聞いてやる！」

「ほれ、おまえの初めての男だ、懐かしからう。」
「思い出せコイツで処女を奪われ、女になったアノ日を・・・」
惣一郎と結ばれる前に女の喜びを教えてやった雄の性器を！」

顔前に突き出されたツレは
見覚えある形と懐かしい臭いをまとい
怪しくゆめり踊っていた。

「この匂い、この形、
おまえの体の隅々まで犯し尽した
ワシのマラが欲しいのじゃあろ。」
「遠慮はいちも何時もの様に味わって楽しむが良い。」

鼻腔深くまで届く雄の性臭に頭の奥が痺れ
男根から眼が離せなくなっていた。



チュツ・

駄目と判っていないながらその誘惑は抗し切れず
亀頭の先に舌を伸ばし鈴口を舐めあげる。
舌尖に感じる懐かしい味が脳髓を蕩かす。

「やはりな、

おまえの体はこの味が忘れられん様だな。」
「もっつと頬張れ、口全体でワシを感じろ！」

言われた通りに

口一杯に頬張り喉全体で感じたい。
僅かに残る理性の枷がこの先の行為を
恐れて躊躇する。

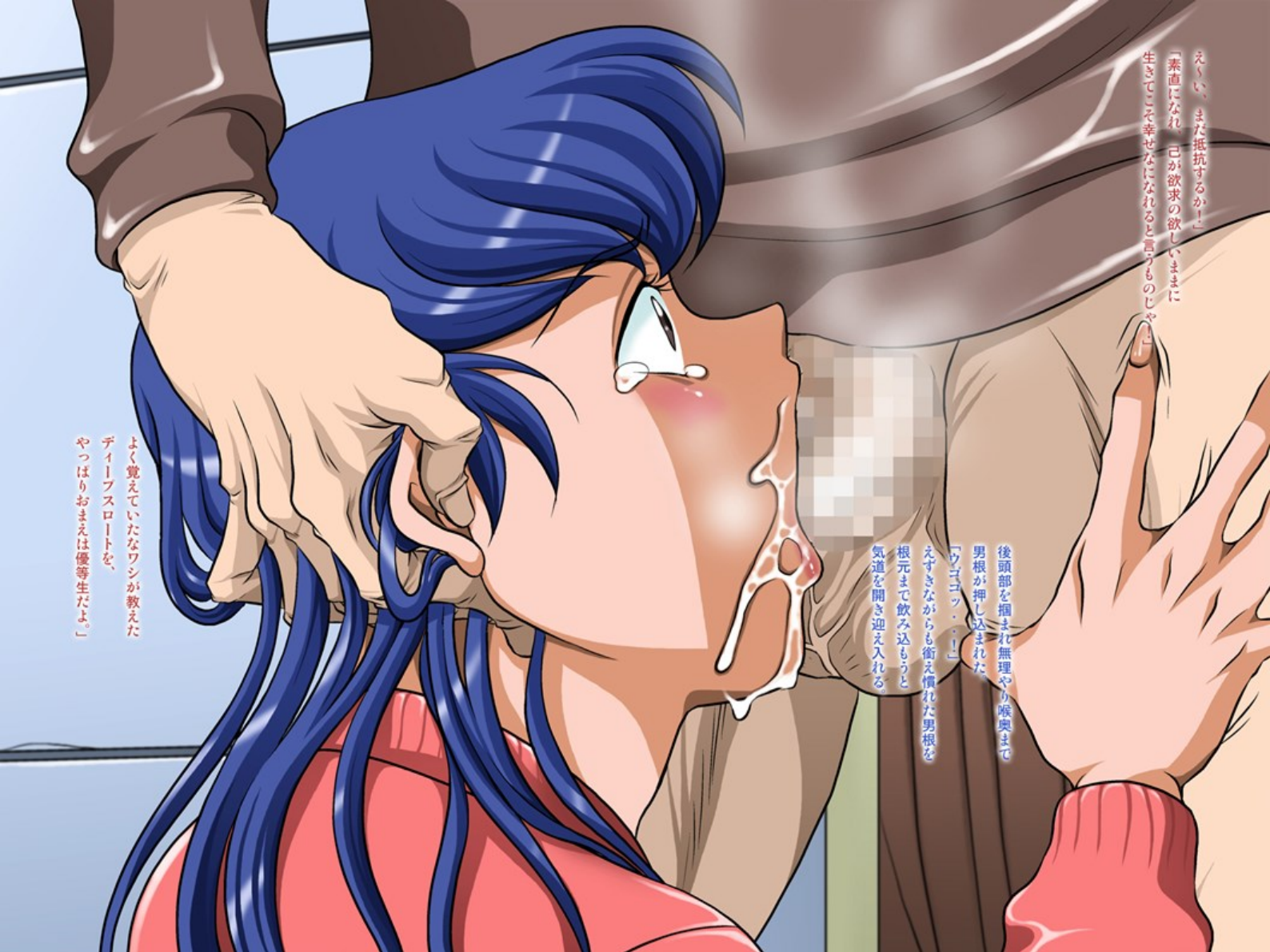
えい、また抵抗するかー！
「素直になれ、己が欲求の欲しいままに
生きてこそ幸せになれると言っものじゃー」

後頭部を掴まれ無理やり喉奥まで
男根が押し込まれた

「ウゴニッ……」

えすきながらも衝え慣れた男根を
根元まで飲み込もうと
氣道を開き迎え入れる

よく覚えていたなワシが教えた
ティーフスロートを、
やっぱりおまえは優等生だよ。」





「惣一郎にちよっかいを出して来た頃から
おまえの事は目を付けていたからな。」

「息子との結婚を認めたのもおまえが欲しかったからじゃ、
己の欲望を満たしてこそ幸せな人生と言うものじゃ。」

「判るか響子、これが本当の幸せと言うものだ！」

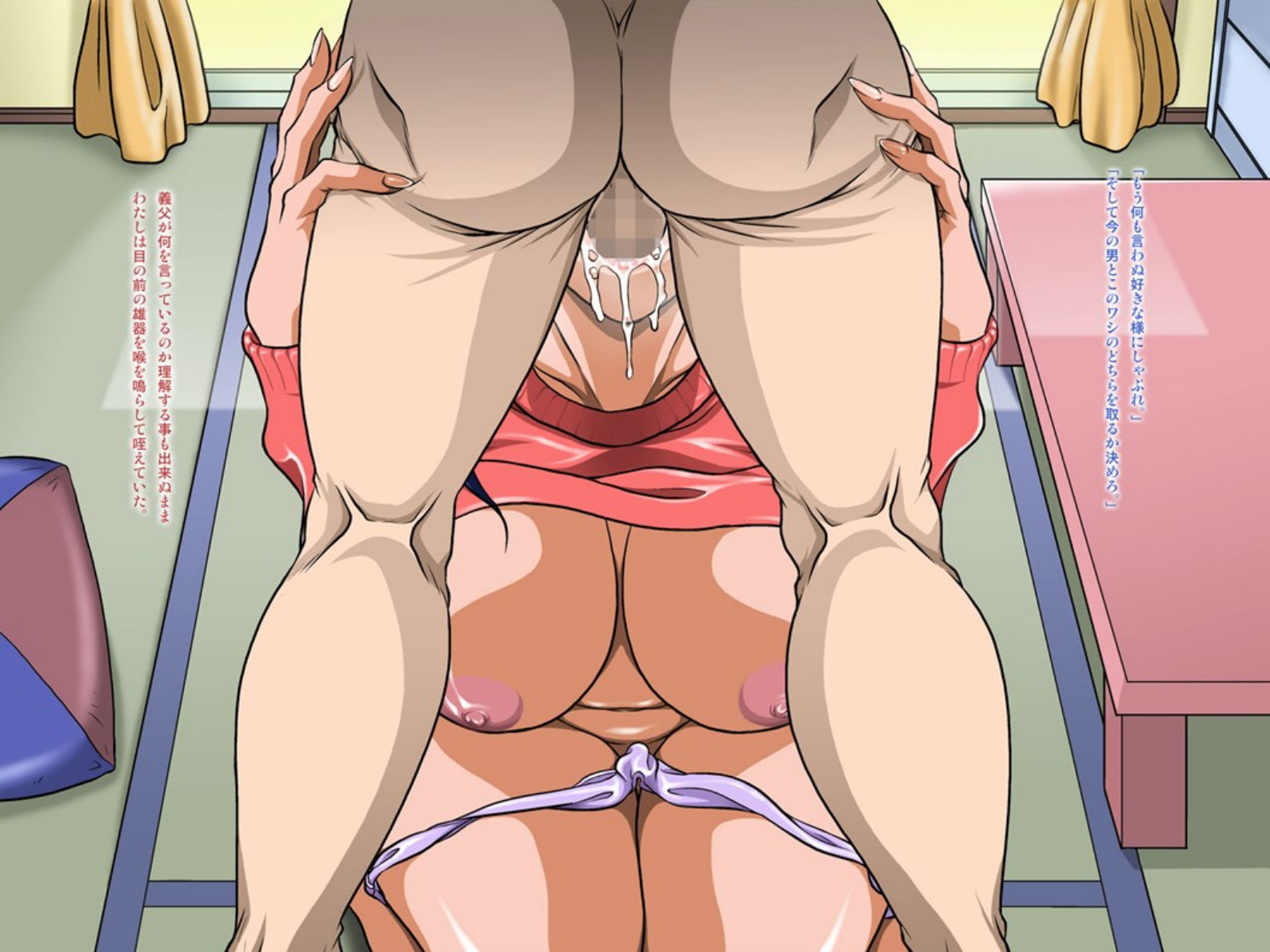
口内に広がる雄の発情臭は

呼吸と共に肺を満たして行く

でも不思議と嫌ではなかった、

むしろ心地良いと思える匂いだ。

この匂いに包まれないとさえ感じていた。



「もう何も言わぬ好きな様にしゃぶれ」
「そして今の男とこのワシのどちらを取るか決めろ」

義父が何を言っているのか理解する事も出来ぬまま
わたしは目の前の雄器を喉を鳴らして啜っていた。



涙と涎にまみれわたしの顔はきつと酷い状態だったでしょう。
義父の満足げに見下ろす顔からその征服感の大きさが判りました。

そんなわたしもこの傲慢な支配欲の塊を抵抗無く迎え入れる
被虐感の甘美な誘いに心が激しく揺れ動いていました。



このまま墮ちるのは容易い事、
でもそうしたら裕作は如何なるの？

深く傷付き絶望し

わたしを憎んで蔑むでしようか？

むしろその方がわたしは救われるでしよう。

でも彼ならもしかしてこんな私を……

ドキュードブツ、ドブツ、ビュクツッ!!
不意に口内に放たれる熱い精液の奔流、
余りの量に息が詰まり涙が溢れる。
逆流した精液が鼻腔内にもで流れ鼻の奥に性臭が
染み込む様

「久しぶりのワシの精液の味は如何だ!」
「量、味、臭い、五代の小僧と比べてみる。」
「おまえはどちらを取るのだ?」



選ぶ？何を・・・？

精液で男を選ぶって事？

そんなのどうやって決めるの？

判らない・・・何を基準にパートナーを選ぶの・・・

わたしの選択は正しかったの??



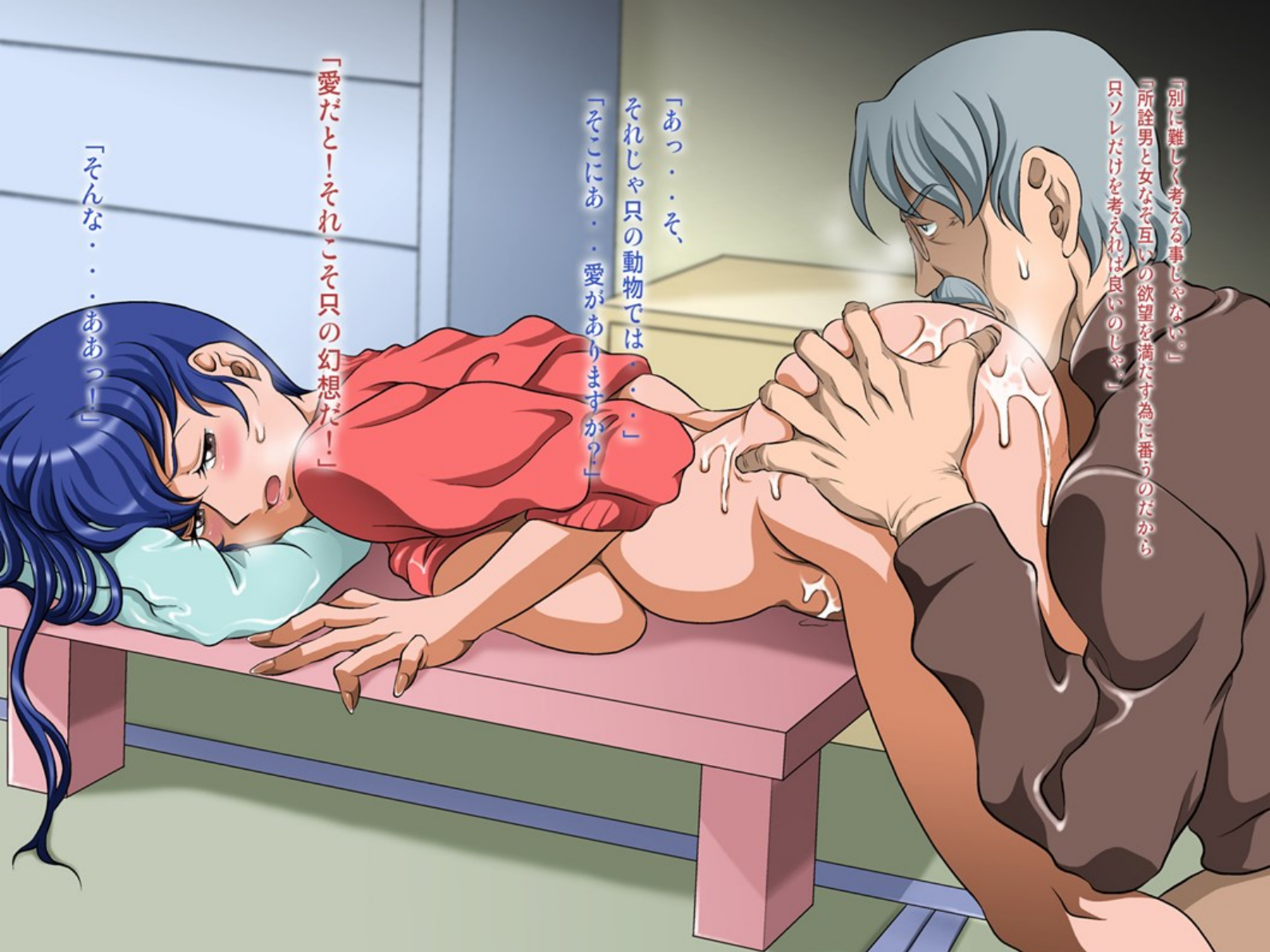


「まだ迷っておるのか？」
「この際もう一度徹底的に仕込まねばなるまい！」

「ああっ……」

「こんな昼間からこんな事を……」
「今日は電球を換えないとだっ……ダメ……」

腰を揺まれ動けないわたしの
陰部を丹念に嘗め回す義父の舌は
感じる場所を的確に捉え、
快感を高める為に焦らし
徐々に局所に迫る。



「別に難しく考える事じゃない。」
「所詮男と女なぞ互いの欲望を満たす為に番うのだから
只ソレだけを考えれば良いのじゃ。」

「あっ・・・そ、

それじゃ只の動物では・・・。」

「そこにあ・・・愛がありますか？」

「愛だと！それこそ只の幻想だ！」

「そんな・・・ああっ！」



「はああっ・・・！」
「ダメ！・・・ダメですこんなの・・・」
「わたし・・・わたしもう・・・ああっ！」

「ぶふふ・・・そろそろイきたいか？」
「イかせてやろう、ワシのモノだと認めるなら！」

「そ、そんな・・・」
「あつ・・・ダメ！」
「イク！・・・イかせて！」

「あ、認めます。。。」
「わたしは。。。お、お嬢さまのそとです」
「だから。。。お願い、しますっ。。。」
「イかせてください！」

「そうだ、やっと素直になつたな」
「それでこそワシの醫子じや」
「イかせてやる！思い切り、何度でもな！」

（御免なさい裕作さん、今日だけ。。。今日だけだから。。。）



(あつなんて罪深い事を・・・)

(裕作さんと寝ている布団で今お義父さまに抱かれようとしている)



(でも我慢出来なかった・・・火照る体を如何する事も出来ないの)
(わたしお義父さまにこんな体にされてしまったの・・・)

「待ちに待ったモノじゃぞ、目を開けてよく見ろ！」
「今からコイツでイかせてやるからな・・・」
「小僧のことなぞ忘れさせてやるわ！」

改めてじっくり見たソレはとて長く太く遠しくそり立ち、
比べたくはなかったのですが裕作のモノとは比較にならない
正にオスそのモノでした





(今までこんなモノで犯されていたんだ…)

(惣一郎や裕作に抱かれても何故か物足りなさを感じていたのは

コレのせいだったのだ！)

(コレがわたしを…女に…発情したメスに変えるのね)

(恨めしい…こんなモノに屈してしまうわたしのカラダ！)

(イヤらしいカラダが！)



「響子タンと味わえよ！」
ぬちっっっっくちゅりっっっ

お義父さまに言われた両膝を抱えたおねだりホース
亀頭の先で陰唇を分け開き血管が浮き出て
使い込んだ黒光りするペニスがつっくりと挿入される



ズツ！ズフツツ・・・！ぬちゅー！

「・・・んっ・・・クツッ」

「ああああっ・・・！」

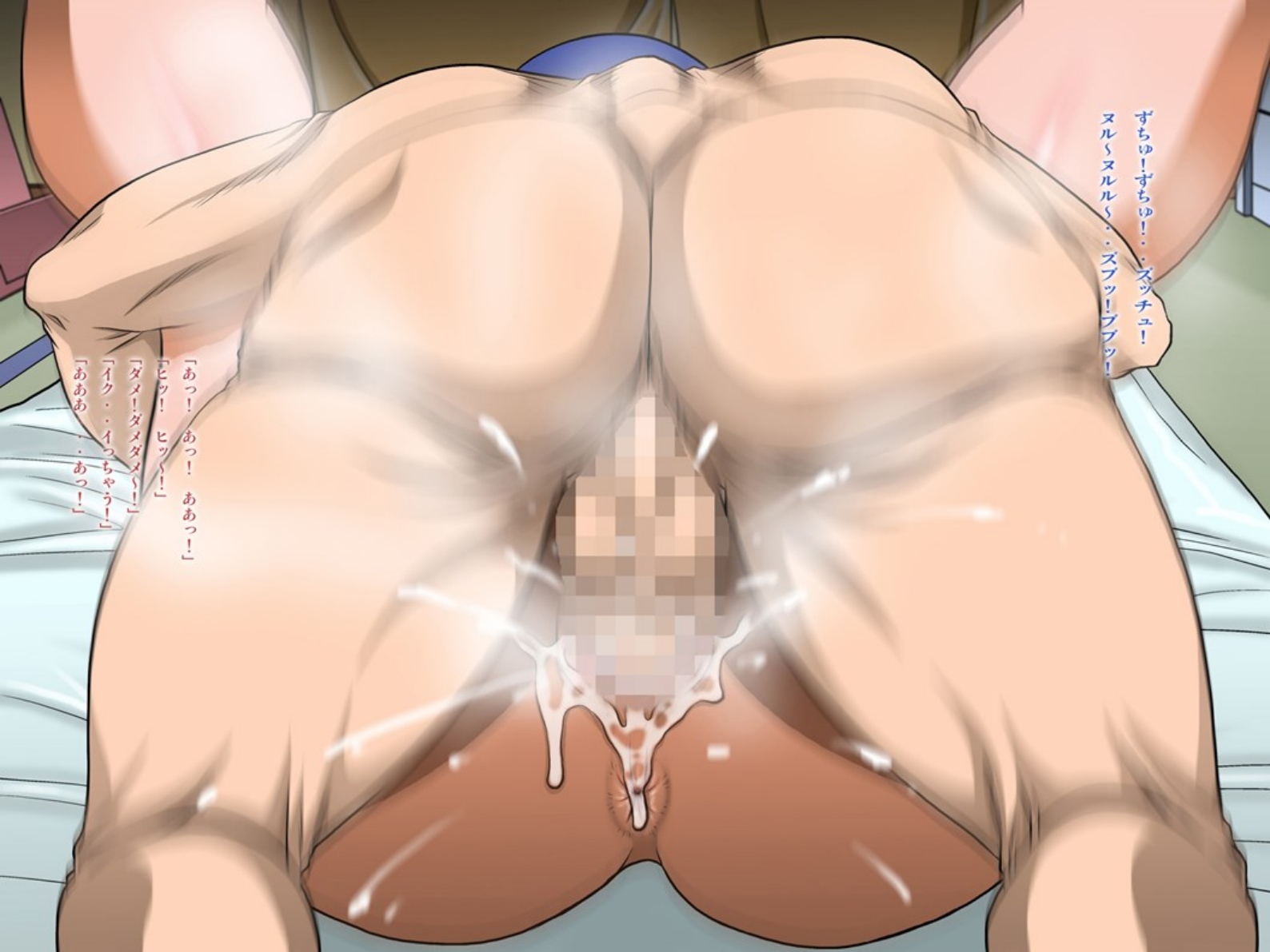
お義父さまのヘニスはゆっくり入り入って来たと思ったらしいが奥まで突き入れられた。龟头の先が子宮に届きそう・・・

「良く絞まる良い臆だ、響子の性器は稀に見る名器だわい。」

「小僧には扱いきれんだらうて？ うん？」

「安心しろワシがおまんを満足させてやる。」

「行くぞ響子！」



ずちゅーずちゅー！…ズツチュー！
ヌル々ヌルルく…ズブツ！フブツ！

「あっ！ あっ！ ああっ！」
「ヒッ！ ヒッ！」
「ダメ！ ダメダメ！」
「イク… イっちゃう！」
「あああ… あっ！」



「んっ…あっ!…ああっん!」

義父の老練な性技に体が応え反応する。裕作とは違う滑らかな腰の動きに揺さぶられ体の芯が熱く疼き喜びの嗚咽を漏らす。

「思い出したか響子?」

「ワシのマラの味を、おまえの初めての。そしておまえを孕ませます唯一の生殖器を。」



「は、孕ますって…そ、そんな」

「まだ子供を作る計画は…裕作とはまだ…」

「この期に及んでまだそんな事を言うか！」

「大丈夫ばれやせん」

小僧とワシの血液型は同じだしな！」



「あつ！……そごは……」

「判るか？おまえの子宮口にワシのマラ先が
当たっているのが。」

「ここにワシの子種をぶちまけてやるぞ、
小僧に負けない特濃ザーメンで孕まして
やるわ！」



どくっ！
どぶっ！どぶっ！

「ああ、イヤアッ！」

「おおっ・・・おふっ！」

「ふほほ・・・よう出る、よう出るわ！」

肉壁がマラに絡み付いて男の精を搾り取る
最高の肉壺じゃ」

二時間後・
・
・



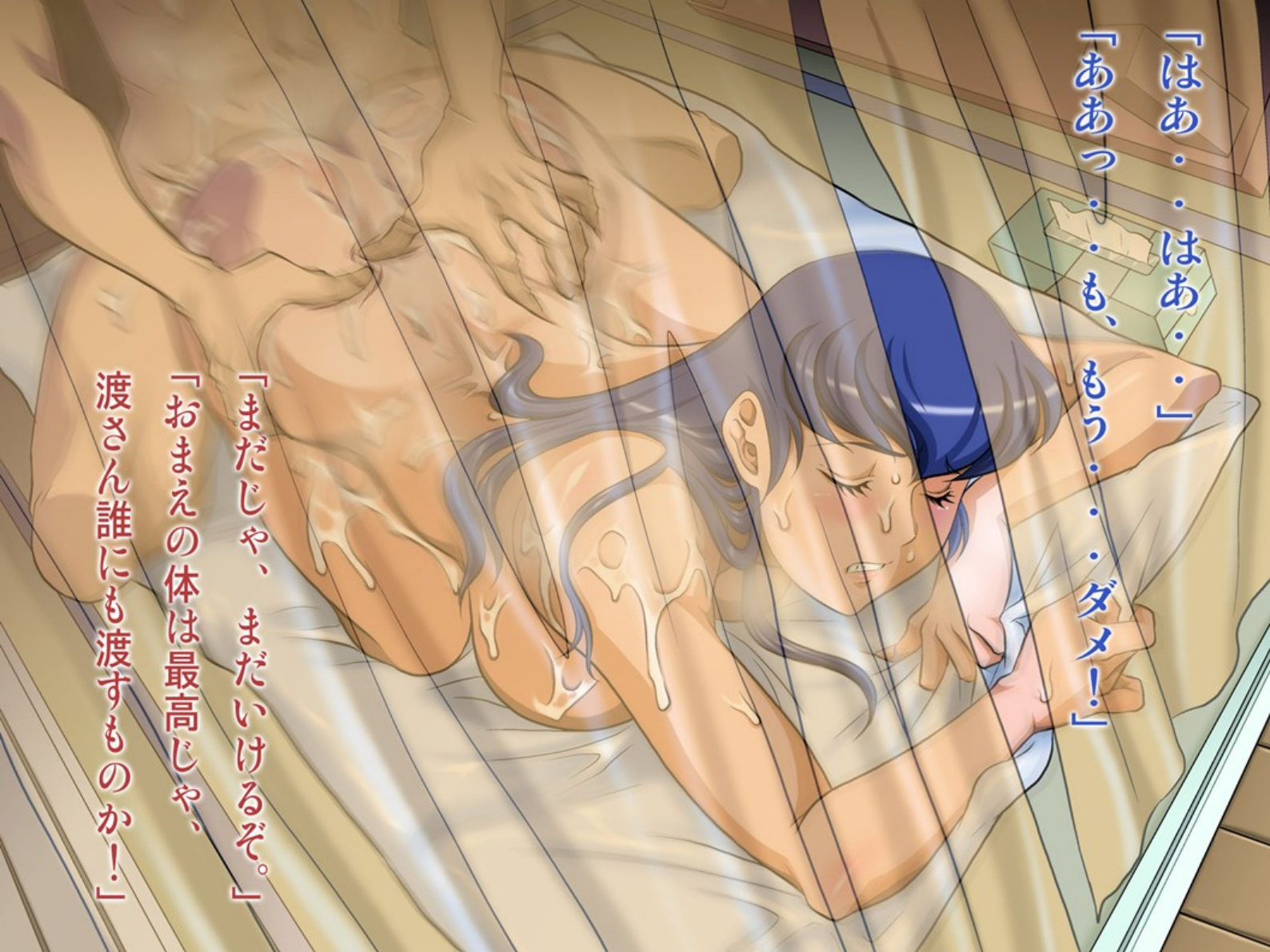
「はあ……はあ……」

「ああっ……も、もう……ダメ！」

「まだじゃ、まだいけるぞ。」

「おまえの体は最高じゃ、

渡さん誰にも渡すものか！」





わたしの膈内に何度も吐き出される
義父の精、
ペニスは一向に萎える事無く
より強くより深く穿ち
犯し尽くそうと打ち込まれる。

メスを求め孕ませようとすする
オスの本能が子宮を刺激し
受胎しようと精子を迎え入れる。



「ふーふー」

「これで最後・留めの一撃じゃ!」

「受け取れ響子〜!」

一際腰を打ち込み

密着させたペニスの根元が

脈打ち精が放たれるのを

敏感に感じ取る。



「おおおあつっのっ」
「入るっ入ってくるうっ」
「ダメなのにっダメなっっイ、イケー」

すっかり緩みきった子宮口に
押し当てられた鈴口から
勢い良く熱い精が放たれた。
精子を残さず吸い込もうと
子宮がポンプの様に収縮する

その日の夜。
義父の残り香のする布団で
裕作に抱かれた。

不義の負い目を打ち消そうと
いつも以上に体を寄せ、足を絡ませ求める
わたし……





「ごめんなさい」と心の中で

誤りながらも、

わたしは何時しか

昼間の義父との性交を

思い出していた。

あの甘美で痺れる様な背徳感に

子宮が緩み、

溜まった義父の精が膣内に溢れ出し

裕作のペニスに絡み付く。

裕作のモノでは届かぬ

奥の小部屋。

その扉に「孕め！」
とノックした義父の雄器。

その訪問を迎え入れてしまった
わたしの子宮。

罪深いメスの獣欲





「ねえ、今日はわたしにさせて？」

裕作のペニスを胸に挟みやさしく扱く。

「如何？気持ちいい？」

快感に身悶える裕作の姿が愛おしい……

こんな気持ちがあるのだから大丈夫。

まだやり直せるはず……



「ねえ、気持ちいい？」

(ああっ・・・気持ちいいよ！)

「わたしのこと愛してる？」

(も、もちろんだよ響子。)

「わたし裕作さんになら何でもしてあげる・・・こんな事だつて。」

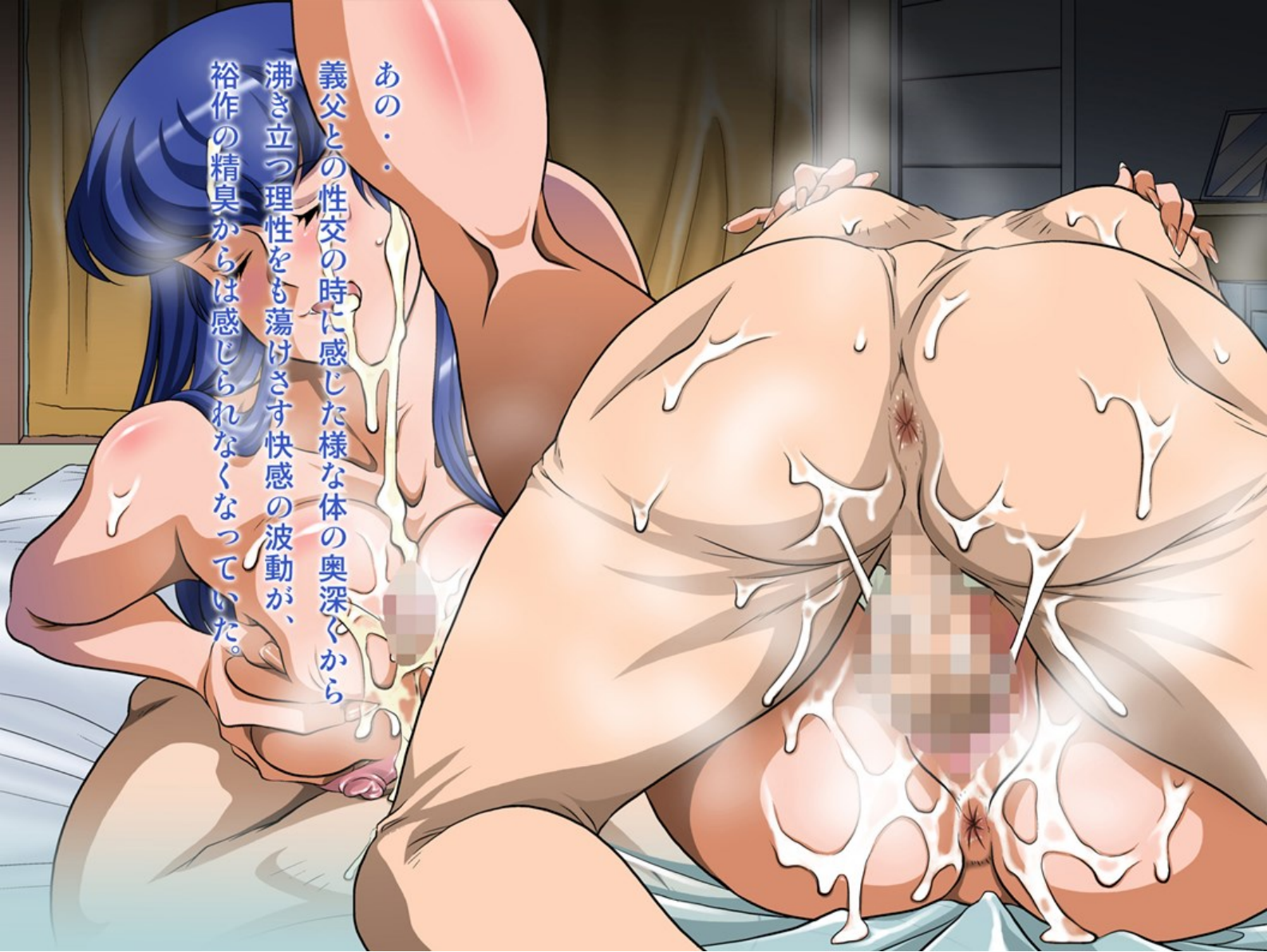
(僕も君の為ならなんだつて・・・ああっ！)



ビュッ！ ビュクッ！ ビュッ！

若さに違わぬ勢いの良い青臭い精液が胸間で弾け飛ぶ
部屋の中に若い精臭が充滿する。

でもわたしの体醒めたままだ、
あの熱く燃える様な興奮が湧き上がらない。



あの…

義父との性交の時に感じた様な体の奥深くから

沸き立つ理性をも蕩けさす快感の波動が、

裕作の精臭からは感じられなくなっていた。



オスに組み敷かれ、精を放たれ征服される喜びを知ってしまったこの体は敏感にそれを感じていた。

心で拒みつつも自ら足を絡めて腰を引き寄せ深い射精を促す体。気持ちには本能には勝てないのか？わたしは如何したいの？

「受け取れ響子、ワシの子種で孕め！」

「孕め、孕め、孕め！」

どくどくどく！

打ち込まれる命の楔は
重い滓となって子宮に溜まる
わたしはそれを受け入れたのだ
遺伝子配偶者として。
答えはとっくに出ているのに
頭でそれを拒絶する。





「おおっ！巧いぞ響子！おまえの尺八は絶品じゃ。」
「如何した？この前とは違い積極的ではないか、
ワシのモノになった事やっと思めたか？」

目を置かずに義父は再び訪れ
当然の様にわたしを抱いた。
部屋の主が居無い隙に種付ける
託卵行為の始まりだった。



抵抗しても体が反応してしまう、

ならば流れに身を任そう。

裕作が先か、義父が先か、

わたしを孕ますのはどちらの雄か？

掛けてみようと・・・

強い生殖能力を持つ雄の

子を産む、それが雌の本能

なのだから。



わたしには平凡な結婚生活なんて無縁なんだと
言い聞かせ。
この二匹の雄と獣臭塗れの繁殖性交をはじめた。

今日は義父との外出交尾日。
朝から体が疼いて仕方が無い。
裕作を仕事に送り出し、
身支度を整え急いで外出する。
裕作に、アパートの住人に
悟られない様に平静を装って。
罪悪感は不思議と感じなく
なっていた。





「おあああつ！」

「あつ！ あああつ！」

「はー ふー はー ふー」

「あふつ！ んふつ！ おおおつ！」

「もつと鳴け、もつと叫べ！」

「誰にも気を使う事は無いぞ、

本能のままにおまえの雌を曝け出せ！」



ヌチャヤ！ズツ！ズブ！ズズズツ！

義父の上で激しく腰を振る。

裕作とはまだしたことのない騎上位で

快感を求め自らの欲求を思い切り吐き出す。

こんな恥ずかしい体位も

義父となら躊躇なくやれる。

自分の素直な欲望を晒す事が

出来るのだ。

これがわたしの本当の姿、

皆に知って貰いたい。

「アオオオオツツ・・・！」
激しく雄叫びを上げていきまくる。
見栄も尊厳も無い素の自分を晒して。

義父だけが知る本当のわたし
千草でも五代でもない
音無響子がここにいる。





「なあ、母ちゃん。

最近管理人さんの部屋から変な音がしないか？」

「何馬鹿な事言ってるんだよこの子は！」

「今も外出して居ないはずの管理人室から・・・」

「いいからとつとと塾に行ってきたな！」

「とうちゃんみたく成りたいのかい？」

「判ったよ、うるせいなくババー」

「親に向かって何て口聞くんかい！待ちな賢太郎！」



ガタツ...コト...
ギシ、ギシ...

「んっ...んあっ...」
「あっ...」
「...」

「確かに聞こえたんだけどなー
気のせいかな？」

「中々勘のよい子の様だな？」

「だが扉の向こうで響子がこんな事をしてているなんて
思いも付かんかったようじゃな。」

「お願いです・・・」

「こんな格好あの子に見られたくない・・・」

「では止めるか？ 抜くぞ、

イク寸前じゃった様だが仕方あるまい。」



「それは駄目！」

「抜かないでください。

もう少し、あと少しでイキますから！」

ヌチュ・ヌル・

「・動いて・腰を動かして・ください。」

「この体位は疲れるわい、イキたければ自分で動け！」





ギシッ！ガタッ！ガタッ！

「あっ！あん！ああん！」

「これ、これが好きなの…」

堅太郎…わたしこれが大好きなのよ！」

ヌチャ…ズチュ！ズチュ！

ビュツ…ビュツ！

「あのがキに見せたいか？

おまえの痴態を見て貰いたいか？

マラに串刺しにされ腹の中を

掻き回されてる姿を！」



見られたいけど、見せたく無い。
そんな相反する感情がより興奮を掻き立てる。
異常な性交でしか感じられない体になっていた。



「あもーいー! 店で入るから!」

「管理人さんなにサボってるのかしら!」

「二階のトイレ電球切れていて嫌なのよね」

「仕事に遅れちゃうじゃないのよ!」

「ちょっと誰だか知らないけど早く出なさいよ!」



「んーんー!」

「んごっ!」

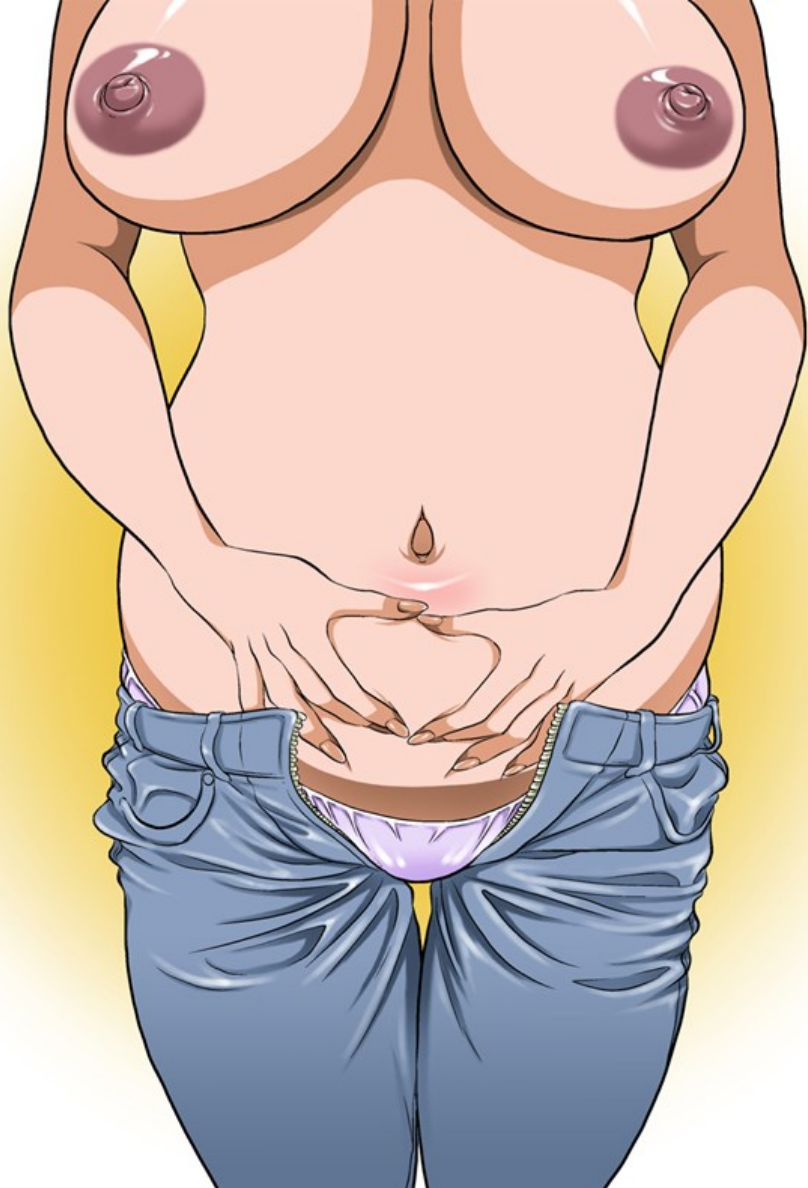
「……ん……んぐっ……」

種付け性交を始めてから四ヶ月、
生理が遅れていた。
妊娠検査器の反応は陽性。



わたしは妊娠した。

わたしの中に新しい命が生きている。
母になるそれは不思議な感覚。



それが誰との子供でも
わたしの子供に変わりない。



それとも...

お義父さまの...



「安定期に入って随分大きくなったね。あたしの腹と変わらないくらいだわ！」
「まあ順調で何よりだね、景気付けに一杯行くかい？」

「やだ！」之瀬さんたら。

妊婦にアルコールは……」

「ハハハ……冗談だよ！」

大家さんはどう？前祝に一杯！」

「いや、わたしは結構。」

「なんだい乗りが悪いね！」



「そうかい？なら良いんだけどね。いつそ大家さんが父親役てのはどうだい？ガハハハ。」

「いやいや彼もそう捨てた者ではないですぞ。」

「もー言い過ぎですー之瀬さん！」

「まあ、赤ん坊なんてほっとけば心配しなくてもポン！と産まれるもんさ！」
「大変なのは五代君の方さ！あんな頼り無くて父親が務まるのかね？」

「あのババア察しが良いのか、
それとも只のお調子者なのか？」

「凶星を突いて来よった！」

「ワシとおまえの関係を気付いた住人がいるのかもしれないぞ？」



「それより安定期に入ったのならそろそろよいじやろ？」

「おまえを抱けず溜っておつてな先ずは口で処理じゃ。」

「残さず吸い出せ、良質のタンパク質は腹の子にもイイぞ！」

「見事な腹ポテ妊婦だな、

益々いやらしい体つきになりおつたわい。」

「乳も張ってパンパンじゃ、もう母乳が出るのか？」

「いたっ！」

「そんな強く握ったら痛いです。」

「これぐらい刺激せんと乳は出んぞ我慢せい！
ワシの子にやる大事な母乳なんじゃからな。」



ビュツッ! ピュッピュッ

「よう出る、よう出るわいこれなら乳に困る事はない。
これでワシの子も立派に育つわい。」

「ま、まだどちらが父親か決まった訳では」

「ワシの子に決まっておる!」

生物は皆、強い雄の遺伝子を残すようになってくる。
ワシが小僧に負けるものか!





「我が子にあいさつせねばな。」

「どれ、ここが子宮口か？」

「出産が楽になるように産道を拡げてやろう。」

「ああダメです・・・子宮の中に・・・先が入って・・・
拡がつっちゃうー！」



「ああっ！出てる、子宮内で射精しちゃ駄目！」
「赤ちゃんにかかっちゃう！」

「こうして腹の子に父が誰なのか判らすのじゃよ！」
「これから出産するまで何度も何度も・・・」
「腹の中をワシの遺伝子で満たしてやる。」



「ハッ ハッ ハッ ハッ・・・」

「どうしたシロ元気がないな？」

「ハッ ハッ ハッ ハッ・・・」

「ふんふんなるほどそうか。」

飼い主は一日中部屋に籠って

最近散歩にも連れて行って貰ってないとな。」

「それは面妖な、中でナニをしているのであろうか？」

「なあポチ。」

「タロウよ腹は減ってはおらぬか？」

「バウ！」

「そうかでは食べるが良いぞシロー。」

「バウ！ バウ！」



「ああつ…ごめんなさい惣一郎さん。
あなたの事を忘れた訳ではないの…
本当よ許して。」

「響子それは犬に謝っているのか？

それとも息子にかな？」

「本当に罪深い女だなおまえは！」

「そ、そんな…ひどい…もうイヤ！」



「何を言っておる、まだ終わらんぞこれからだ！」
「はれ、尻を突き出せ！しつかり掴まってるよ！」

「は、激しくしないでください。
赤ちゃんがかわいそうです！ああっ！」

パン！パン！パン！パン！

「アッ！
アッ！
アーン！」

「忘れるな響子。おまえはワシのモノだ。」

「小僧も息子の事も忘れる、ワシの事だけを考えて生きる！」

「いいな響子！」

「はっ…はい！」





たふっ！ たふっ！

ズポッ！ズポッ！ズポッ！

「あああつ！ ああん！ イイっ！」

「もっと、もっと突き上げて！」

「そうだ素直になれ、
自分の気持ち解き放ち
全てを受け入れる、
それがおまえの為なのだ。」



「オオッ…アアアッ！」

「ビュッ！グジュ…グジュ…」

「ハァー！ハァーゼーゼー！」

「ああスゴイ…スゴイのが来ました！」

「こんな初めて…こんな…の…」

握り潰された乳房から
母乳が滲み出し甘い香りが
部屋を包み込む。
女の喜びを、
母の喜びを感じながら
激しくイキ果てた。

その日から二人の交尾はより激しさを増し、
汗と体液の交じり合った獣臭をアパート中に撒き散らした。

そこが番の巣である事を
確認するかの様に...



「ファン！ファン！ ファン！」

「ハチン！ パチン！ パチン！」

「ヌチャ！ スチャ！ ヌジユ！」

「アッ！ アッ！ アアッ！」

「出して！ 精液出して！ わたしの中にぶちまけて！」





ドクッ！ ドプッ・ドプッ！

ビュッ！ フシヤ！ ビュッビュッ！

「おまえの心も体もワシのモノだ…
ワシの…ワシだけの女だ！」

「そうです…わたしはお義父さまの…
アナタの女です！」



「アーン！ アーンもっと強く！ もっと深く打ち込んで！」
母乳で張り切った胸を千切れんばかりに
揺り動かし全身を使って快感を貪り叫ぶ。

こんなに開放された気分は初めて、
体が自分の気持ちに素直に反応する。



「出してー出してー！わたしの子宮に焼き付けて！
ビュルツ〜ビュルル〜
部屋中に母乳を撒き散らし
オスの射精を促しねだる。」

惣一郎にも裕作にも求めた事がない
おねだりを・・・



「この子にも、おなかの中の子にも教えて下さい。」
「父親の・・・あなたの思いを流し込んで上げて！」

わたしは確信した。
この子はあなたの子、
音無の血を引く子だと

「響子おおおっ！」
ビュク！ビュルルル！」

熱い精液が子宮に流れ込み子供とわたしを染めあげ
雄の命の迸りを吸い尽くす。





「響子おまえは・・・おまえは誰の・・・
ひやもろい！ そんなことは・・・」

「響子は・・・響子だ！」

「ああっお義父さま・・・カワイイ人。」

「わたしは今もそしてこれからも、
音無響子です。」

音無



人の命と儚いものです。

あれほど精力絶倫だったお義父さまは
流行風邪を拗らせ呆気無く亡くなって
しまった。

子供の顔を見る事無く。



「お義父さまこれが春香です。」

「春香ちゃん、おじいちゃんですよ。」

（無事産まれましたよあなたの子です。）

（音無の血は継ぎますよ安心して下さい。）

「笑って春香、あなたの（パパ）よ。」

Fin